N-3　石巻市牡鹿地区十八成浜　　2012年5月3日（木）

報告者名　山口未花子　　被調査者生年　①未確認（男）
調査者名　山口未花子　　被調査者属性　①十八成浜区長
補助調査者　高倉　浩樹・兼城　糸絵

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

＊話者②　生年未確認（男）、捕鯨会社社長
＊話者③　生年未確認（男）、地区役員
＊話者④　生年未確認（男）、地区役員
＊話者⑤　生年未確認（男）、地区役員
＊話者⑥　生年未確認（男）、地区役員

十八成浜本祭―神社での神事

あいにくの雨模様のなか開始時刻である朝の9時に会場となる白山神社に到着すると、神社の境内から祭り囃子が聞こえてきた。人が集まるのを少し待ち、本殿のなかで神事が始まった。

神事では宮司が祝詞を唱え、お祓いをし、それが終わるとお神酒をみな一口ずつ回して飲む。祭り囃子が再開され、お年寄りから若者、子供までがかわるがわる演奏する。楽器は大太鼓×2、小太鼓、横笛（大体常時2人）、という編成であった。

これが終わると、みんな高台にある神社の階段を下りて下の広場で神輿を待つ。神輿本体がまず本殿から鳥居を出たところに設置された台のところまで運ばれ台の上に載せてある担ぎ棒に括られる。神輿を担ぐのは十八成周辺から集められた約10人の白装束に身を包んだ若者で、神輿を先導する塩まき役の若者もおなじ白装束である。さらに神輿の後ろを宮司さんがついてゆく。この日は大雨強風警報が出されていたので、消防隊が付き添い、公道へは出ないようにという指示があった。神社から公道までの本来集落があった場所の家屋は津波で流されてしまい、大きなガレキはほとんど撤去されているが、そのなかに道を作り、そこを神輿が通るように設定されていた。2日中にそのとおり道に落ちていた小さなガラスや陶器の破片を集落の人々が拾い、人が通っても危険が少ないようにしておいたという。

神輿は要所要所で止まり、その場で祝詞と餅まきが行われる。

本来は集落を回って行われるためかなり時間がかかるというが、今回は行程が短縮され、白山神社以外の2つの神社まで足を延ばすこともなかった。また、本来神輿はさいごに海に浸けるのだが、これも今年は禁止された。それでも担ぎ手たちは海の際まで神輿を運んだが、そこはお年寄りの判断で海へ入ることはなかった。

最後にお神輿は神社の下で解体され、本殿に仕舞われる。本殿ではまだお囃子が演奏されている。最後に餅を投げて神社での神事は終了する。

直会

12時過ぎころ、今度は浜の憩いの家（公民館）で直会（なおらい）が行われる。会場は2つの部屋と台所に分かれており台ところに近い小さい部屋のほうに女性のグループが、大きな部屋に男性と外からの客が座る。大部屋には長机が置かれ、正面には区長と宮司が座る。

女性たちが調理した刺身や汁物、おにぎり、そして出来合いのお惣菜等が運び込まれる。昨日の聞き取りにもあっ

写真１　白山神社

写真２　白山神社：神事

たとおり、鯨のベーコンや刺身が山のように並んでいる。これは十八成に住む鮎川捕鯨社長が提供したという。ビールや日本酒、ジュースも並んでいる。まずはじめに区長からのあいさつがあり、皆で乾杯する。外から来た建築家と私たち東北大の無形民俗調査のグループが紹介される。また、神輿を担いでいた若者たちの自己紹介もある。彼らのほとんどは十八成に縁はあるものの、現在は別のところに居住している。

今回祭りをするにあたり、ボランティアが神輿を担ぐという役を買って出てくれたのだが、「来年もいるとは限らない人に頼むより、お金を払っても今までやってくれた（そしてこれからもやってくれるだろう）人に頼む」という判断で、いつも通り近隣の浜の若者に声がかかった。この紹介のとき「鍛冶屋の息子」などという紹介の仕方がなされたが、これは実際に実家が鍛冶屋をしているのではなく、代々鍛冶屋の家系であったことが「屋号」として残されているのだという。

その１つの背景にこの十八成という浜は捕鯨関係者を輩出してきた浜であるという点があげられる。捕鯨を直接捕る捕鯨船乗組員や解体員（現役 OB 含め）が何人も参加していた。さらにそれだけではなく、捕鯨船の大砲作りの職人（屋号は鉄砲屋）や鍛冶屋など多くの職人が存在していたし、鯨の骨などから肥料を作る家（屋号は肥料屋）などもあった。現在ではこうした職業はほとんど十八成では生業として成り立たなくなったが、屋号や人々の記憶の中にはまだ鮮明にその姿をとどめている。というのもこうした捕鯨関係の職が激減したのは 1980 年代に起こったモラトリアム［商業捕鯨の一時停止］を受けてのことであり、比較的最近のことだからだろう。それまでは十八成は捕鯨基地であった鮎川浜に隣接していたこともあり、捕鯨と密接な関係を持って栄えてきたことが推察される。現在でも捕鯨会社の社長が「お祭りのため、この時期に鯨肉が確保できるかどうか毎年ひやひやしている」というように、十八成の人々の生活や習俗の中に捕鯨文化が息づいているといえよう。幸運にも今年は４月から宮城沿岸でミンククジラを対象とした調査捕鯨が行われており、捕鯨会社もそこに参加していたため、ちょうど３日前に捕れたミンククジラの肉を提供することが出来たという。タイミング良く捕獲があったために一度も冷凍せずに刺身を提供できた、と社長が言うように、これまで捕鯨調査をする中で数多くの鯨を食べてきた中でもかなり美味しい肉であった。

しかし今年は捕獲頭数という点ではいつもより成績が悪いのだという。その原因は、いつも鯨の発見率の高い福島側の漁場を今年は使わず、北側の漁場を使っていることにある。昔から福島側の漁場で９頭鯨が発見されたら、北側の漁場で１頭発見されるくらいの割合だったというほど、漁場による差は大きい。しかし放射能の影響を少しでも減らすためにそうせざるを得ない、という判断が下された。そのせいもあってか今のところ、基準値を超える放射線量は計測されていないという。

区長さんの話

区長さんは、この祭りを成功させることにとても心を砕いたという。5月3日は十八成にとって大事な日だから、どうしてもといって去年震災の直後でも、今年の悪天候でも、この日に祭りをすることにこだわった。特に十八成の祭りは年に一度であり、集落の全員が参加するという点で他の浜と違っている。この日にやることは、神様のことだからというのもあるが、全員がこの日に集まるためにも大事なことだという。

それでも被災の影響はある。本来神輿を若者が担いで集落全体を回るため、担ぎ手はおにぎりを食べたりしながらゆっくり回るため、直会も14時くらいから始まるのが普通。また、飾りの花も震災前まではみんなで手作りをした。でも被災後にお金を出し合ってプスチックの花の枝を購入した。それは、高齢化や過疎化が進む中で将来準備が大変になることも考えての判断だった。プラスチックの花ならまた来年も使える。

昨年の祭りでは、神社で祈祷をし、復興祈願もした。神輿はガレキがありあまり回れなかったが、餅は作って撒いた。直会は神社のなかでやった。

祭りは浜全体でとり行うのだが、取りまとめは氏子や理事が行う。区長は氏子総代ということになる。

祭りについて（役員４人からの聞き取り）

もともとこの祭りは旧2月11日に行われていたそうだ。その後、4月11日（新暦）に代わり、それからまた日を変えて5月3日に行うようにしているという。その理由を尋ねてみると、人が集まらないことが挙げられていた。特に、モチをまく時に子どもたちがいないと拾う人もいないから、ということで子どもたちが参加しやすい5月3日に設定したという。祭りのさいにはハクサン（白山神社）、シンメイシャ（神明社）、コンピラ（金比羅神社？）、オイナリサン、イワトリゴンゲンといった場所を1日でまわっていったという。祭りが行われる前日には前夜祭を行う。その際には神社で祈祷してから、そのまま酒を飲みながら神社に泊まるのだという。以前は公民館にて商売人（とはいっていたが、何か芸事で生計を立てている人の意味らしい）を呼んで何かしてもらっていたこともあったが、今はしていない。

現在私用している神輿は7年前に作ったものだという。昔の神輿は1トンもあったといい、車に乗せてまわしていたようだった。生憎今日の祭りでは神輿を海に入れるようなことはなかったことについて言及すると「本当は海に入りたくてぴょんぴょんしている」などと語っていた。話者である役員たちが言うには神輿が海に入るのは十八成浜だけだといい、かつては桟橋の方から神輿とともに海に飛び込むようにして入っていたという。海に入れなかったのは去年と今年だけだとのことだ。話者たちが神輿を担いでいた頃は暴れ神輿のようだったといい、車を

写真３　白山神社前：神輿

写真４　十八成浜憩いの家

壊してしまったこともあったと笑いながら話していた。また、現在公園となっている場所はかつて墓地であり、そこを通過する時は止まってはいけないといい、神輿をかついで一気に走って通過したとのことである。

祭りの際には紅白モチをつくり、家内安全を祈願して各家庭に配布するという。それは、ウチガミ（家の中にある神棚、と説明してくれた）に備えてから食す。

現在、若者がいないため担ぎ手は村出身者あるいは村出身者が経営する会社の従業員を雇っている。一人につき1日10,000円の日当を出しているといい、今日は時間も早く切り上げられたため「（若者たちは）得しているな」などと話していた。